

# 郊外コミュニティにおける定年退職男性の「男性性」再構築

——ライフストーリーからの考察——

関村（木村）オリエ\*

## Reconstruction of retiree's masculinities in suburban community:

examination from their life stories

SEKIMURA (KIMURA) Orié

### abstract

In this paper, the author examines the transformation process of the masculinities, through the life stories analysis of the male retiree in suburban estate (Sakuragaoka, Tama City, Tokyo) advanced by the employee's retirement. After 1990, it has been clearly pointed out that gender is not essential structures but social, cultural differences. Femininity and masculinity is not already an axiomatic, and it is possible to be modified. The author used surveying technique life story to understand men's identity, culture, and societies from the life and the experience. Their narrative included that they reflect on masculinity which they have maintained especially at office space. The narratives tell us that masculinity is never a monolith but constructed in contextually and dynamically. In suburban communities, residents have various behaviors beyond modern, fixed gender role. Men involving the community need construct new masculinity which can positively undertake change in flexible gender role. To achieve this, men should share housework and caring works with women, and restructure their masculinities to collaborate with women.

Keywords: masculinities, retirement, life stories, gender, suburban community

### 1. はじめに

1970年以降、各地の郊外住宅団地やニュータウンに都市中流階層の住民が入居しはじめた頃、妻である女性たちの存在確認は、専業主婦として無償の家事労働に従事することによって得られた。一方で夫である男性の存在もまた、世帯収入の稼ぎ手として、都心への長距離通勤を伴う長時間労働に専心することで確認された。都市中流の核家族世帯の夫と妻たちは同様に、職住分離の構造の下で日本型都市システムの構成要素に組み込まれていった（影山 2004）。しかし、「生産労働に従事する男性」と「再生産労働に従事する女性」という性別役割分業は対等なものではなく常に序列化されていた。このような文脈の中で、男性はフェミニスト研究者たちによって暗黙のうちに「女性的な〈他者〉を抑圧する存在」と捉えられる傾向にあった（伊藤 2002）。確かに男性中心的社会構造にあって、これまで男性たちは「特権」を持ちながら女性たちとの間に支配／被支配関係を積極的に作り出してきた。だが、男性＝抑圧者という男性の優位性の保持を前提としながらジェンダーをめぐる

---

キーワード：男性性、定年退職、ライフストーリー、ジェンダー、郊外コミュニティ

\* 人間文化創成科学研究科研究院研究員

研究が遂行されること自体が、問われるべき権力関係の再生産を促す危険性を孕んでいる（多賀 2001、村田 2002b）。本研究では、こうした問題意識に立ち、少子・高齢化や経済の自治体財政の縮小化などの変容過程にある都市郊外地域における定年退職者のライフストーリーの分析を通じて、彼らの持つ男性性の変化とその再構築の過程を考察する。

## 2. 男性学の展開と覇権的男性性

男性の位置性をめぐる議論に対して積極的に関与してきたのが、日本ではフェミニズムに呼応しながら1990年代より本格化した男性学／メンズ・スタディーズ<sup>1)</sup> (men's studies) である。メンズ・スタディーズは、男性性も女性性と同様に、本質的で自明なものではないこと、社会的・文化的な構築物として作り出されてきたことを指摘する。それゆえ男性性は、女性／男性という単純な二元論の中では決して捉えきれない（多賀 2006）。コンネル（1993）は、さまざまな男性性の中で優位を占める男性性の形式を「覇権的な男性性 (hegemonic masculinity)」と呼んでいる<sup>2)</sup>。覇権的な男性性は女性たちとの関係のみならず、従属化された男性たちとの関係において構築され、時としてホモソーシャルな空間を形成しながら維持されている（セジヴィック 2001）。

これまで性差をめぐる権力関係においては、男性性は「健康な、経済的な、異性愛主義的な」特性と同義として考えられ、これらを付帯するとされた男性たちは常に一枚岩として捉えられてきた。しかし、覇権的な男性性に対する個々の男性の在り方は多様であり、また変わり得るものである。日本において男性性の視点を先駆的に取り入れた伊藤公雄は、男性学を「男性の視点から、男性社会を批判的に解剖することを通じて、男性にとり〈人間らしい〉生活を構想する実践的な学（伊藤 2002）」と述べる。たとえば近年、日本型雇用慣行のもとでキャリアの継続を優先させてきた男性たちが、定年退職を契機に自己のアイデンティティの中核としての収入や職業上の肩書きなど仕事に関わる要素を離脱し、男性性の揺らぎの中で生じた自己への葛藤を語りはじめている（多賀 2006）。こうした動きは、覇権的な位置から支配あるいは疎外された男性たちによる、覇権的な男性性への抵抗運動とも捉えられている。

男性性は歴史的な時間と場所に根ざした構築物であり、その具体的な現れ方は必ずしも一様ではない。その支配的な特性や形態を明らかにするためには、空間構造の解明が不可欠である（ジャクソン 1998）。しかし空間構造やその変化との関連から男性性を考察した研究は欧米・日本いずれにおいても、まだまだ研究の蓄積が少ない。「男性優位」であった日本の地理学（熊谷 1991）においては、逆に男性研究者により、男性性のポリテクスやイメージ、セクシャリティなどの視点の導入がなされていることが注目される。丹羽（1991）は支配する立場としての男性性への自覚と脱却のための視点を主張し、村田は中年シングル男性（村田 2000）や異性愛をめぐる政治家の発話（村田 2002a）、広告メディアの作り出すイメージなどの分析（村田 2005）を通じて、男性性と公共空間の関係性について仔細に論じている。

## 3. ライフストーリーを通してみる「男性性」

### 3.1. 調査手法

本研究が依拠する調査手法としてのライフストーリーは、質的調査の一つとして位置付けられる。量的調査法は、マクロレベルの（空間）構造に対象を位置づける上で有効だが、既存のカテゴリー体系を前提とするために、常に主流派の性別・人種・階級以外の人間の経験（とりわけ女性や有色人種などのマイノリティの経験）を取捨選択し排除してしまう（Mattingly and Falconer-Al-Hindi 1995）。これに対して、質的調査では、カテゴリーを流動化させたり、文脈化したりすることによって、カテゴリーを規定するバイアスさえも研究対象として提示し、調査者の「客観性」への対峙を問題化しようとする（Moss 2002）。これは、覇権的な男性性の中で周縁化され差異化されてきた存在を可視化する点で適した方法といえる（McLafferty 1995）。

本研究で使用するライフストーリーとは、人生や過去の経験についてのインタビューを通じて、人々のアイデンティティや生活世界を理解するための調査手法である（北澤・古賀 1997）。桜井は、ライフストーリー研究では、調査者がインタビューを通して被調査者一人ひとりの人生における文脈を構築することに参与し、語り手

や社会現象を理解・解釈する共同作業に従事すると述べている（桜井 2003）。本研究はこのような手法を厳密に踏襲するものではないが、住民の個別具体的な実践の姿を詳細に分析するために、桜井の視点を参考にしながらデータの収集・分析を行なった<sup>3)</sup>。

これまでライフストーリーは、ジェンダー・カテゴリーとの関連から、「女性」のインフォーマントに適した知の方法論であることが指摘されてきた。細谷（1995）はこの理由として、男性たちはこれまで社会的に無徴化されてきたのに対し、有徴化された存在である女性は自己をジェンダー・カテゴリーとの関係で位置づけなければならなかったことを挙げる。しかし、ライフストーリーが社会的に有徴化されてきた人々とその実践を掬いあげる手法であるとするれば、その射程には女性主体ばかりではなく、霸権的な男性性の周縁に置かれた男性主体も含まれるはずである。定年退職男性は、職場で構築した自己の男性性を脱構築し、居住する地域に適合した新たな関係性を築く必要に迫られる。仕事以外の自分と向き合い、己の行く末を問い直す彼らの語りには、さまざまな葛藤が見出され、そこには自己の男性性への反省的な言及も含まれている。こうした男性の語りを読み解こうとするライフストーリーは、男性性なるものが決して一枚岩ではないこと、さらには男性性が空間構造によって規定され、それが常に動的であることを確認するための一助になると考える。

### 3.2. 対象地域の概要

研究対象地域である多摩市桜ヶ丘団地は、東京都多摩市の北東部に位置する桜ヶ丘地区にある。桜ヶ丘団地は、1960年代という高度経済成長の隆盛期にサラリーマン世帯の憧れの対象であった戸建ての高級住宅団地であり、私鉄系資本によって開発された最新のインフラストラクチャー、立地環境の良さを魅力として多くの上級ホワイトカラー層が一斉に入居した。桜ヶ丘では、入居世帯のほとんどが明確な性別役割分業のもとで生活を営んでおり、専業主婦である妻たちに支えられながら、稼ぎ手である夫たちは長距離通勤・長時間労働に従事し、自宅へ「寝に帰る」という生活を送ってきた。近年桜ヶ丘では、人口高齢化が進み、2005年の国勢調査によれば人口高齢化率は30%に到達している。過去30年間の人口推移をみると、東京都平均に比べて桜ヶ丘は2倍以上の速さで高齢化率が上昇しており、高齢化の進行は急速である。開発からおおよそ半世紀に差し掛かろうとする桜ヶ丘団地を選定することは、上級ホワイトカラー層が暮らす計画的郊外住宅団地の成熟過程を考える上でのモデルとなるばかりでなく、性別役割分業を自明視し、郊外コミュニティとはほとんど無縁だった男性たちがいかに地域社会への帰還を果たし得るのかを考える上で有効である。

著者はその中で、地域を拠点として活動するサークルへの参加を果たした定年退職男性に注目した。サークルへの参加は退職男性のすべてに当てはまるものではないが、地域の間人との接点が乏しかった彼らでも比較的気軽に参加できるものであった。さらに桜ヶ丘団地は、公的な投資が多く見られる多摩市の中心に位置し、近隣の活動施設の充実とアクセスの良さから、サークル活動の参加機会に恵まれた地域といえる。本研究では、サークル活動に参加した退職男性たちのライフストーリーを個々に取り上げ、郊外コミュニティにおいて彼らが新たに構築しようとする価値観や関係性を「男性性」の再構築という視点から分析・検討する<sup>4)</sup>。

## 4. 退職男性の語りに見られる「男性性」

### 4.1. 卓球クラブを設立したAさん

Aさん（67）は1968年に桜ヶ丘団地に入居し、居住歴は35年になる。鉄道会社に勤務し、渋谷区まで毎日1時間半かけて通勤をしていた。在職時は、帰宅後や休日も仕事を自宅に持ち込むほどで、地域の自治会活動などにはほとんど関わる時間がなかった。

会社は、渋谷が本社。朝の通勤自体は便利だけど、混むし、特急がないから大変だった。昼間のほうがアクセス良いね。ラッシュとか考えて、20分くらい余計にみて出社したりした。(略) 渋谷までは、そんなに遠くはなかったけど、結局仕事ばかりでした。ローンもあったし、家を途中で投げ出すわけには行かなかったしね。

趣味であるスポーツはずっと欠かすことはなく、社内においては自ら率先してスポーツサークルを設立して活動していた。退職後まもなくAさんはスポーツサークルを多摩市の情報誌で探し、卓球サークルに参加した。

(退職男性で) 体動かす人はさほどいないよね。前から鍛えていたりしないと。この社会も厳しいわけ。体が

動かないと飛び込めないんじゃないかな。多摩広報にね、募集が出るわけよ。顔出すのだけど、レベルが違うの…駄目だよ。相手の印象も違う。威張っていたり、雰囲気が悪いところもたくさんあるから。気分の良い人たちと出来れば、それが最高だが、なかなかそうもいかない。そういう時に、いやになっちゃう人もいないんじゃないかな。でも、私は新しいところでも平気で飛び込んでいったし、ヘコタレなかったの。

Aさんは、スポーツを楽しむサークル活動が生み出すつながりや、人間関係の深まりはある程度期待していたものの、卓球サークルが参加者たちの「溜まり場」になることは想定していなかったという。メンバーは卓球に集まったにもかかわらず、夫婦関係や家庭の不満を溢し合うこともしばしばあるという。Aさんははじめ戸惑ったが、私的な相談も交わす信頼関係を築くことができた活動の場を以下のように振り返る。

私は、集まりなら何でもよい、ということじゃなかったから。体を動かしていくという集まりね。会社でも、サークルでもそうなのよ。大体、「俺が、俺が」じゃ駄目だよ。常に、犠牲的、ボランティア的に行かないと、リーダーがね。(中略)卓球は競い合う人のクラブや、楽しみましようってクラブやいろいろ。でも、うちはコスライ方じゃないから。結局、お話でもいいから、集まって「楽しみましよう」の方ね。

#### 4.2. 教育に関するNPOを設立したCさん

次に、NPOを設立し、代表の役職に就くCさん(73)の事例である。Cさんは、退職前の早い段階から地域に根ざした活動に関心を寄せてきた男性の事例として注目したい。

Cさんは1968年に入居し、居住歴は35年である。鉄鋼会社の企画部に所属し、業務の企画・立案に専念してきた。勤め先は千代田区にあり、平日は朝早く出勤して夜遅く帰宅し、週末は自宅での時間を残業の処理や企画の勉強に利用するという毎日だったため、ほとんど地域社会との接点はなかった。

奥さんとは今二人暮らし。彼女が結婚したとき、会社で働きたいみたいなこと言っていたけど、俺が稼いでいたからその必要はなかったね。専業主婦でやってきたよ。(略)会社勤めはそんなに簡単に出来るものじゃない。

サークルに参加して行く趣味は特に持っていなかった。近所の人とは挨拶を交わす程度であり、どのような人が桜ヶ丘団地や市内に住んでいるのかななどにも関心はなかった。また自治会の役回りや、夏祭り、バザーなどの団地内での行事はほとんど妻に任せきりであった。だが、引退後の生活は、Cさんにとって思い描くような穏やかなものではなかった。

男が威張っていた分、(地域で)女がその反動で威張っているじゃん。女ってのは、強制的でイカン。子ども扱いですよ。われわれが家庭にいと、子どもみたいに扱われる。どの旦那もそうだよ。きつと。「私の言う事聞きなさい」って。自分が間違っているって、分かってないのかね。(略)一緒にのんびりしたって良いようなものでしょう。(略)あんまり女が威張り散らしちゃいけないよ。男もまたね、女見たらお茶入れろと言うのも確かにいけなかったのだけさ。

Cさんは、退職後にしばらく自治会の活動に関わった。彼は、家庭と異なって地域での生活には周囲との摩擦もなく、抵抗なく参加ができたと振り返る。この経験を通じて、会社と地域との空間の特質の違い、そこでの男女間の振る舞いに強い関心を示している。

みんなと一緒にいるためには、自分で話題を提供する。何を提供してもいいのだけど、皆様を集めるには、皆様の関心を集めるような話題じゃないとね。デパートの社長さんとか、建設会社の社長さんとか、役員さんもいろいろ住んでいるから、なかなか一同に会するのは難しいけどね。(略)知り合いが自治会会長さんやっていたけど、彼は封建的なんだよ。だから、そんなのじゃ駄目だ。 (略)その後、会長やっていた彼も、癖があったから。難しいですよ、役員やビジネスマンばかりなのだから。(略)ここの会長って、女性がやる事も多いわけ。それで、女性が男性に言いにくいわけよ、いろいろね。男性のほうも聞かないじゃない、「会長」とか言われる人が。(略)男が、意識改革しないと駄目だね。会長とか好きなやついるじゃんか。役職だけというか。…いるよね、役職ついちゃうと威張るやつ。自治会長とか…会社みたいに。ただのおじさんなのに威張るやつ。「この男、ただか自治会長なのに」って。俺びっくりしちゃったよ。

#### 4.3. テニスクラブを設立したHさん

Hさん(78)の入居は1964年であり、居住歴は39年になる。Hさんは千代田区の化学薬品の会社に勤務してい

た。海外出張や新規取引先との橋渡しを任されるなどして、会社の中でも早い段階で役員の職に就いた。一方でHさんは、仕事で稼ぐことは結局のところ、家族を守ることであり、会社での残業は極力自宅に持ち帰るなどして、家族との時間をできるだけ確保するよう心がけていたという。

妻ともいろいろ楽しみたかったのよ、仕事もほどほどにして。二人で仲良く、健康に。これから効果が示されるところだよって、引退直後はテニスだと張切っていました。(略)一人で生きていけるのならいいのですよ。だけど、山とかそういうところじゃないからね、ここは。人と一緒にやりたいと思いながら、そういうところに参加できないとあって、やっぱり残念よね。人生、会社だけというのも、かわいそうなことだよ。男の方がそういうの苦手ですよ、みんなの輪に入るみたいなのは。だから、男は会社で偉かったやつというのは大体閉じこもるよね。

退職後はテニスを通じて人々と知り合う機会を得ようとしたHさん夫妻だったが、サークル内での一部の人のふるまいや全体的な雰囲気疑問を感じたHさんは、自ら代表となって新たなテニスクラブを設立することを決めた。ボランティアグループで活動し、グループを介した知人や友人の多い妻の協力もあり、Hさんが設立後すぐに20名を越えるメンバーが集まった。Hさんは、前サークルでの経験を踏まえ、持ち前のリーダーシップでテニスクラブを心地良い活動の場として作るために、会則なども設けている。

Hさんのこうした配慮は、家庭でも発揮されている。このテニスクラブにどんな時でも妻と一緒に参加できるように、Hさんは家事を担うようになった。というのも、Hさんは自分の引退後も相変わらず妻に家事を任せ続ける状態で、妻だけを置いてサークル活動をすることに抵抗を感じたためである。

運営態度と家庭がどのように関連するかわからないが…夫婦の楽しみの一環でやっている。そういう意味では、女性ばかりに気を遣わせないように、男性だっていい潤滑油になるように。家でもワックスなんか使って床掃除やらをしてくる。一緒に楽しみたいから。夫婦の関係改善の場になると良いと思います(笑)。クラブでも、男性には変な派閥は絶対に作らせないようにしている。会社人間は、気を抜くとすぐに作るから。その代わり、女性もそういうのはナシということ。

Hさんは、テニスクラブの仲間を中心に、その後、男性向け料理教室もインフォーマルな活動として始めている。Hさんは、もともと料理好きであり、料理番組のチェックや自宅での妻の手伝いをこまめに行ってきたという。Hさんは、退職男性が家庭生活を円満に過ごすという点において、サークル活動のような気軽な機会に家事スキルを充実させることが重要であると考えている。

奥様のためにぜひ包丁の使い方を覚えましょうか、とね。先生いないから、うちは自由自在。自分でレシピ考えて、自分で買い物行くのね。料理教室の講師や事務役を全部自分たちでやる。日頃の感謝の意を込めて。わざと、女性は呼ばないの。奥さんのために料理を作るというのが趣旨だから。現役中なんか殆ど包丁など握らずに、食ってばかりいた連中だから。もっとも、事前の下ごしらえとか、妻に教わる事が多いのだけど。(略)メンバーの出身地がバラバラで、郷土料理が多いの。NHKの料理教室や新聞の切り抜きなんかを作るのが多いから。何でも作れる人もいて、買い物してきて、パッパッと作れるやつもいる。結構レベル高いの、やれば出来るってことだ。(略)ゆう桜ヶ丘(コミュニティセンター)もそうだけど、いろいろな環境はそろっているからね。作る部屋、食う部屋と。最後に、奥様に来てもらって食べてもらうの。うちの妻なんか、呼んだら泣いていましたよ。

#### 4.4. 合唱・合奏グループに参加したFさん

合唱・合奏グループに参加するFさん(73)は、在職中から趣味のサークル活動を行ってきた。Fさんの入居は1971年で、桜ヶ丘での居住歴は32年になる。趣味である楽器演奏には中学校の頃から親しんできた。システムエンジニアとして働いている傍ら、ジャズバンドの活動にも精力的に取り組んでいた。

今は嫁とそのお義母さんと同居している。僕の両親は、中学と30歳のときにとっくに(亡くなっている)。(略)学生のときは、住まいが溜まり場みたいなものになっていた。集まるのは、そのときから好きだったのかもね。誰か知らない人まで集まっていたから(笑)。会社になんか入ると、バラになるから。仕事の付き合いだからね、所詮。会社終わったら、会社を忘れて遊ばないと。勤めの時からそうですよ。柔軟に。切り替えと言いましょうか。

コンピューターを扱う職場では常に孤独な作業が多く、もともと人と集まって会話を交わすことが好きだった

Fさんにとっては、趣味の楽器演奏を通じて仲間との交流ができることは、仕事中心の生活における楽しみのひとつであったという。

僕がここに来たのは、15年前。仕事していたときは、なかなかそういう時間なかったけどね。越してきたばかりは、ね。サークルなんか動き出したのは、5年くらい前。仕事終わってからだよ。昔は、普通の会社にいましたから。(略)僕は、技術職で。技術屋さんですよ。硬い職だから、楽器や趣味やる人も多かったですよ。同僚もそういう感じでした。僕は、若い頃からウクレレとか、ギターでした。今は、初心者の人たちとやるのは楽しいですよ。プロにはならなかったけど、教えるのはまた僕には向いている事だと思う。名選手が、名コーチとは限らないでしょう。こっちは知っているけど、知らない人に教えるのは難儀だよ。でも、一緒にできるよとなると楽しいし。

退職後は旅行に行くなどして、家族サービスに努めようと考えていた。ところがFさんの意思とは裏腹に、妻は地域とは別の交友関係を持っていた。Fさんの妻は、共に過ごすどころか、一日中自宅にいるFさんに外に出るよう勧めたという。その後、在職中にパソコンを教えたことのある顔見知りの主婦から合唱団を結成したことを告げられ、Fさんに協力を依頼したいとの要望を受けた。これをきっかけとして、Fさんはこの主婦たちの合唱団での本格的な活動を始めた。

あまり深い考えはないけど、奥さんたちに誘われたから。こころ辺で過ごすようになって、何かないかなと覗いてみただけ。そしたら、こういう機会があったというだけ。別に、「地域に入ろう」とか、そういうのはなかった。先ほども言ったようにバンドをやっていたから。(略)ウクレレの場合は、地域活動というかバンド活動ですよ。たかだか、趣味です。ところが、男性は「また、今度」なんていいながら参加しませんから。面倒くさい、というのがあっても知れない。本当に好きじゃないとね。僕も本当は、面倒くさいのだけど。(略)男性の場合は、会社勤めに徹しているから、もう組織で付き合うみたいなのは嫌うじゃない。そのくせ、リタイアしても(会社仲間と)集まったりする。僕は、しないけど。会社の仲間は、会社きりだよ。

#### 4.5. 福祉ボランティアに参加したGさん

Gさん(74)の桜ヶ丘団地への入居は1965年であり、居住歴は38年になる。教員だったGさんは、江東区にある中学校に勤めていた。在職期には自治会などに参加した経験はなく、時間的余裕以前に無関心であったということもあり、地域のことや近所のことについてGさん自身は、ほとんど関与しなかったという。専業主婦である妻もまた、自治会やPTAの役職以外はほとんど家事や4人の子どもの子育てに専念していた。

持ち帰りでテストの答案採点などを抱えつつ、多忙だったGさんであるが、家族との時間は確保したいという思いから、子どもとの外出や妻の買い物などをして休日を過ごしていた。地域までには及ばなかったが、在職中は家族の問題、特に子どもの教育・しつけには真摯に向き合うように努めてきたという。

やっぱりね、定年…仕事を退いて家庭にいる時間が長くなるわけですよ。そうすると、その結局家事労働、家内が中心になってやってきたことを手伝う時間が多くなるわけですよ。外に出て地域に、とかね。そうすると、今まで見てきた家内なんかが、思っていた以上に違う、立派に見えるわけですよ。全然、顔が違って見える。家内から教わることが結構多いわけですよ。立場の逆転というか。教えてもらう事がずいぶん増えたわけですけど、かといって、これまでの態度はなかなか変えられないというか。そういうわけにもいかない…まあ、腹のなかでは「こりゃ、大変だ。学んでいないことがこんなにも多いものか」と。自分なりに、環境が同じもの同士で見えなかった世界をどんどん踏襲しようかと。立場の逆転…新しい環境に入って行って、知らなかったことをドンドンって。老年になると難しいわけだ。だから、そういうことがスーッとできるかということが問題になる。

教員を退職後、しばらくは多摩市内の小中学校にて相談員の仕事を行っていた。相談員としての仕事も終わった頃、地域社会での貢献を目指して多摩市のシルバー人材センターに登録をしたが、病気のために体調を崩して入院し、シルバー人材センターは結局1年で辞めることになった。やがて体力的には回復したがこれ以来、Gさんはすっかり地域でのサークル活動に消極的になってしまった。現在のサークルへの参加は、夫を力づけようとした妻が、自身も参加するボランティア・サークルに誘ったことがきっかけであった。

メンバーは女性だけじゃなく、男女混合というのがまた入りやすいですよ。夫婦で入るか多いでしょう。そういう意味で男性も割合と多いでしょうね。教わる事は手段という感じで、こういう会に入れていただくとい

うのはつながりという意味で有意義でしたね。冷たい世の中ですしね。(略) われわれも仕事しているときはそんなことかまっていられないし、関心なかったけど。内面的には、ボランティア活動もまあ、やりたい気持ちも少しはあったけど。そういう、内心が求めていたものと合致したというか。(略) 女性が古風ですよ、お茶なんかも出してくださって。気持ちはいいですけどね(笑) 俺たちなんかも出来る事があるかと。

Gさんは、妻と毎回欠かさずに練習に参加する。Gさんは、在職期・退職期を通して自分を支えてくれた妻とともに過ごせるようになったことや、夫婦で地域でのボランティア貢献をすることで、退職後に妻と同じ目標を持てるようになったことを喜ぶ。Gさんは、自身の生活経験に照らしながら、地域参加についての見解を次のように述べている。

あるご近所の男性が洗剤飲んでしまったわけ。体が動かなくなって、威張っていた自分の立場が逆になってしまった、ということで。人に世話になるくらい素直になれないし、追い詰められて世を憐んだわけだね。本気で死ぬつもりはなかったのでしょうけど。それが、なかなか主体性ってものを持っていないとそういうことになる。貧しさ、病気、人間関係、そういうのをどうやって乗り越えていけるかと考えなくなると、人に当たってみたり、自分を追い込んでみたりするのね。周りから生きがいを持てとか、そう言ってみたところでしょうがないの。(略) こもっている人は結局出てこない。チャンスを与えても出て来ないのだから、そういう人は。そりゃ、しょうがないと思う。やる気がある人なら来る。なきゃ、テレビでもパソコンでもしていればいいという話だ。楽だしね。

## 5. 考察

退職男性たちが、他の男性たちとの競争や協力、ときに挫折を繰り返して展開してきた職場などの生産領域は、常に垂直的な組織原理で貫かれていた。そこでは同僚であっても、男性＝「企業戦士」／女性＝「補助員」とみなされ、非対称的なジェンダー関係によって支配された。一方家庭の中では、彼らは妻の奉仕を受けながら家父長として存在し、やはり非対称的なジェンダー関係において自己の尊厳を確認してきた。退職男性たちが地域の新たな関係の中で、構成員としての「承認」を人々に求めていく現在、彼らは非対称的なジェンダー関係が支配してきた職場、家庭という二つの場所において維持・強化されてきた「男性性」の限界に直面している。以下、「男性性」の再構築の過程について、整理する。

まず、地域に参加しようとする現在の彼らの語りには、自らの男性性のあり方に自覚と疑問が生じ始めていることがうかがえる。例えば、「ローンもあったし、家を途中で投げ出すわけには行かなかった」というAさんの語りにあるのは、大黒柱として稼ぎを一手に引き受けなければならず、これを決して途中放棄することのできない「男性性」への気付きである。「リタイアしても(会社仲間と)集まったりする。…会社の仲間は、会社きりだよ」というFさんの語りには、退職後の社会的基盤の変化にあっても職場仲間には執着し、地域における人間関係づくりに疎んじる男性たちへの疑問がうかがえる。

次に、職場における「覇権的な男性性」に固執する他の男性の言動を批判的に捉え、自己の存在を新しいコミュニティの中で相対化する視線も存在している。例えば、「役職ついちゃうと威張る。自治会長とか…会社みたいに」というCさんの語りにあるのは、非対称なジェンダー関係の論理を、住民たちに振りかざそうとする他者(男性)の振る舞いや言動に対する戸惑いと捉えることができる。さらに、「人生、会社だけというのも、かわいそうなことだよ…」というHさんの語りでは、「覇権的な男性性」に基づくジェンダー観に縛られるあまり、地域において期待される住民との水平的関係性の可能性に不適応を示す男性たちへの諦めの念すら見て取れる。

最後に、退職男性たちは在職中に依拠してきた「覇権的な男性性」に基づく価値観や規範を見つめなおし、妻や女性たちとの新たな関係の構築を試みている。例えば、「教えてもらう事がずいぶん増えたわけですけど…」というGさんの語りには、家庭内での主導権を当然の如く握ってきた自らの「男性性」を問い直し、妻との関係性をいかに改めるかという試行錯誤のようすがうかがえる。また「男性だっていい潤滑油」というHさんの語りには、既存のコミュニティの協働を促そうとする志向性、男女間の対称的なジェンダー関係を探求しようとする実践の兆しがうかがえる。こうした兆しには、退職男性たちがこれまで郊外コミュニティを担ってきた「女縁」などの影響を受けるばかりでなく、彼らによっても水平的で、協調的なネットワークを形成し得る可能性がある

ように思われる。

## 6. おわりに

退職男性たちは引退を機に、それまでの職場から家庭・家族を中心とした地域生活を送り始めるようになった。こうした事態への対応には個人差があるが、これまで関心の薄かった地域に、関心を寄せ始める男性たちも少なからず存在することが明らかになった。彼らは退職後に自らがこれまで寄りどころとしてきた価値観や規範を見つめなおし、地域におけるサークル活動への参与や自治会への参加、近隣住民との交流を通して郊外コミュニティにおける新たな関係の構築を試み始めていた。

彼らの事例は、都市空間において男性たちが、職場を軸とした生産労働に従事する行為主体から、家庭や地域を中心とした生活者という行為主体への変化を成し遂げようとする過程を示すものである。退職男性たちは、郊外コミュニティの新たな関係の中で構成員としての承認を人々に求める中で、一家の稼ぎ手として自らが獲得し職住分離の空間構造の中で自明のものとしてきた「男性性」の解体を迫られている。このような状況下で彼らは葛藤し、かつての地位に固執した言動をなし、ときには閉じこもりなどの不適応を示す男性も多い。だが一方で、新たな関係性を模索し獲得しつつある男性も存在する。桜ヶ丘は、高学歴ホワイトカラーや経済的に余裕のある退職者が多数を占め、サークル活動のインフラにも恵まれていることなど、いろいろな意味で特殊な場所であることは否めないが、成熟した郊外住宅団地のモデルとして捉えることができる。

退職男性に共通して言えることは、サークル活動への参加が、自身の培ってきた「男性性」を相対的に捉え直す契機となっていたことである。彼らは例外なく、日本型雇用のもとで職場における長時間労働を継続してきた。しかし退職男性たちの語りの中には、空間のジェンダー役割分業を支配してきた「覇権的な男性性」に固執する他の男性の言動を批判的に捉え、自らの男性性のあり方に自覚と疑問を持ち、自己の存在を地域社会の中で相対化する視線が存在した。さらには、事例の退職男性たちの中には職住分離の都市システムの中で作り上げてきた「男性性」を捉えなおし、これを再構築しようとする兆しもうかがえた。こうしたサークル参加の実践経験を通じて、彼らは既存のコミュニティ、特に女性たちとの水平的な協働や空間形成を担う主体となる可能性を秘めているといえる。

しかしながら、サークル活動を通じて地域へと参入する退職男性たちのすべてが、家庭内の再生産労働を主体的に担いながら地域に関わるまでには及んでいないことが指摘できる。近年の郊外コミュニティにおいては、固定化されたジェンダー役割に基づく「計画空間の構成員」としての生き方を越えた多様な行動原理が芽生えつつある。そこに参入する男性たちに求められるのは、彼らがこれまで企業的な組織原理の中で保持し続けた「覇権的な男性性」とは異なる、都市郊外空間の柔軟なジェンダー役割を積極的に引き受けようとする新たな男性性である。退職男性たちは、これまでの職場における非対称なジェンダー関係と垂直的な組織原理に基づく自己の行動原理を見直し、郊外コミュニティにおいて水平的な関係に基づく協調性や他者への配慮を習得することを通じて、将来的な地域の担い手となる可能性を持つ。そのためには、家事やケア労働などの再生産役割の分担を含め、生活の基盤となる家庭とのかかわりを前提とした男性性の再構築、そのための具体的な場所の構築が必要となろう。今後はボランティア活動やNPOなど新たな関係性を構築するための場を提供するような、具体的な空間に向けた試論、特に男性性の再構築を成し得なかった人々をめぐる視点からも、「覇権的な男性性」と郊外コミュニティとの関連性についてさらに考察を加えたい。

## 註

- 1) 渋谷 (2001) は、日本のメンズ・スタディーズ、男性学／男性研究に関して、1980年代～1990年代を第1期、1990年代初頭～1990年半ばを第2期、1990年半ば～現在を第3期と区分する。第3期ではじめて、男性／女性研究者の双方が議論に参加し、メンズ・スタディーズがアカデミズムにおいて本格的に取り上げられたとしている。
- 2) Connell (1987) は、覇権的な男性性が女性との差異によって定義されていることも指摘している。社会的な権威とは結び付かないが、男性支配社会における理想的な「女らしさ」を「誇張された女性性 (emphasized femininity)」とし、覇権的な男性性と利害を一致させて対をなすものだとしている。また彼は、男性間の中で従属化された男性性を「従属的男性性 (subordinated masculinity)」として

いるが、パーソナリティなどと無関係に女性性に近い意味を付与されることが多い。

- 3) 女性調査研究者である筆者は、ライフストーリーを通じて退職男性を対象として研究を行い、インタビューを通じて語り手の社会的・空間的な現象の解釈に努めた。彼らの多くに共通していたのは、生産／再生産労働に振り分けられたジェンダー役割分業を越えたところに自らのアイデンティティ構築を求めようとしていることであった。重要なのは、調査対象者が異性（同性）であるかではなく、自らの置かれたジェンダー役割にどこまで自覚的であり、これに向き合っているのかというインフォーマントの姿であった。
- 4) 調査対象者は、著者の桜ヶ丘におけるフィールド調査（桜ヶ丘自治会会長、会員、桜ヶ丘内コミュニティセンターの館長、施設の利用者）を介して2003年5月～12月の期間中に依頼した。対象とされる男性たちは、自治会、サークル活動を中心に行なう人々である。定年退職をした男性に関しては在職中から退職後に至るまでのライフストーリーを、各インフォーマントにつきそれぞれ2～3時間程度聞き取った。このような背景から、本研究の調査依頼に応じた退職男性たちが自らの持つ「男性性」やそれにともなう問題に比較的自覚をもつ人々であることを断わっておく。

## 【謝辞】

本論文は、2009年3月にお茶の水女子大学に提出した博士学位論文の一部を加筆・修正したものである。論文執筆にあたり、多摩市桜ヶ丘団地にお住まいの皆さまには多大なる御協力を頂きました。また、お茶の水女子大学大学院人間創成科学研究科の熊谷圭知先生、石塚道子先生をはじめとする地理学教室の諸先生方、國學院大學経済学部の田原裕子先生、奈良女子大学文学部吉田容子先生より貴重な御助言を頂きました。心から感謝申し上げます。

## 参考文献

- 阿部恒久・大日方純夫・天野正子編 2006.『「男らしさ」の現代史』日本経済評論社.
- 落合恵美子 1994.『21世紀家族へ』有斐閣.
- 伊藤公雄 2002.『〈男らしさ〉のゆくえ—男性文化の文化社会学—』新曜社.
- 伊藤公雄 2003.『「男女共同参画」が問いかけるもの—現代日本社会とジェンダー・ポリティクス』インパクト出版会.
- 影山穂波 2004.『都市空間とジェンダー』古今書院.
- 鹿島 敬 2001. 安定した夫婦関係のために. 岩波書店編集部『定年後—「もうひとつの人生」への案内』岩波書店: 113-124.
- 北澤 毅・古賀正義編 1997.『〈社会〉を読み解く技法—質的調査法への招待』福村出版.
- 熊谷圭知 1991.「男性優位」の地理学に必要な女性の視点. 地理 36: 14-16.
- 桜井厚編 2003.『ライフストーリーとジェンダー』せりか書房.
- 桜井厚編 2005.『ライフストーリー・インタビュー—質的研究入門』せりか書房.
- 渋谷知美 2001.「フェミニスト男性研究」の視点と構想—日本の男性学および男性研究批判を中心に. 社会学評論51: 447-463.
- 多賀 太 2001.『男性のジェンダー形成:〈男らしさ〉の揺らぎのなかで』東洋館出版社.
- 多賀 太 2006.『男らしさの社会学—揺らぐ男のライフコース』世界思想社.
- 丹羽弘一 1992. 男性の視点は可能か? 地理 37: 78-80.
- 中野 卓 1977.『口述の生活史—或る女の愛と呪いの日本近代』御茶の水書房.
- 細谷 実 1995.「リアルマン」って、どんな奴? 井上輝子・上野千鶴子・江原由美子編『日本のフェミニズム別冊・男性学』: 67-74.
- 村田陽平 2000. 中年シングル男性を疎外する場所. 人文地理 52: 533-551.
- 村田陽平 2002a. 男性・異性愛をめぐる空間のポリティクス—1999年の「西村発言」問題を事例に. 人文地理 54: 557-575.
- 村田陽平 2002b. 日本の公共空間における「男性」という性別の意味. 地理学評論 75: 813-830.
- 村田陽平 2005. 現代のたばこ広告にみる男性の身体と空間. 人文地理 57: 532-548.
- Connell, R. W. 1987. *Gender and Power: Society, the Person and Sexual Politics*. Polity Press. (コンネル, W. 著, 森重雄ほか訳 1993.『ジェンダーと権力: セクシュアリティの社会学』三交社.)
- Jackson, P. 1990. The Cultural Politics of Masculinity: Towards a Social Geography. *Transaction. Institute of British Geographer*, N.S.16: 199-213. (ジャクソン, P. 著, 丹羽弘一訳 1998. 男らしさの文化ポリティクス—一つの社会地理学にむけて. 空間・社会・地理思想 3: 110-127.)
- Sedwick, K. E. 1985. *Between men: English literature and male homosocial desire*. Columbia University Press, New York. (セジウィック, K.E. 著, 上原早苗・亀澤美由紀訳 2001.『男同士の絆: イギリス文学とホモソーシャルな欲望』名古屋大学出版.)
- Mattingly, D. and Falconer-Al-Hindi, K. 1995. Should Women Count? A Context for the Debate. *Professional Geographer* 47-4: 427-435.

McLafferty, S. 1995. Counting for Women. *Professional Geographer* 47-4: 436-442.

Moss, P. 2002. Taking on, Thinking about, and Doing Feminist Research in Geography. In Moss, P. ed. *Feminist Geography in Practice*, Blackwell, London, 442-449.

Murata, Y. 2005. Gender Equality and Progress of Gender Studies in Japan Geography: a Critical Overview. *Progress in Human Geography* 29: 260-275.